

ナシ黒星病の秋期防除適期は 10 月上旬～11 月上旬頃 であり、「幸水」収穫後の防除を削減できる

福島県農業総合センター 果樹研究所 病害虫科

部門名 果樹－ナシ－病害虫防除

担当者 藤田剛輝、七海隆之、日下部翔平

I 新技術の解説

1 要旨

ナシ黒星病の秋期防除は、翌年の伝染源となる芽基部病斑の発生を抑制する上で重要となる。令和元年度の普及に移しうる成果を踏まえ、「幸水」収穫後の防除の削減を検討した。

病原菌の感染部位であるりん片生組織の露出状況を3か年調査した結果、防除適期は10月上旬～11月上旬頃であると判断された。また、秋期の新梢葉及び翌年の芽基部での発病に差は認められなかったため、「幸水」収穫後の防除を削減できることが明らかとなった。

- (1) 3か年(2019～2021)の調査の結果、りん片生組織の露出した芽は10月上中旬から増加し、11月上中旬にピークとなり、防除適期は10月上旬～11月上旬頃であった(図1)。
- (2) 着生位置が先端に近い芽は、防除適期となる10月上中旬より前に露出する場合もあることから、せん定時の先端の切り戻し(先刈り)が重要である(図2)。
- (3) 「幸水」収穫後の防除を削減しても、秋期の新梢葉の発病や翌年の芽基部病斑の発生に差は認められなかった(表1)。前年の調査でも差は認められなかった(データ省略)。
- (4) 以上の結果を踏まえ、秋期防除適期の考え方を図3に示した。

2 期待される効果

散布回数の削減によるコスト低減や耐性菌発達リスクの高い薬剤の使用回数を削減しつつ、本病の被害を抑制し、高品質果実の安定生産に寄与できる。

3 適用範囲

県内のナシ生産者

4 普及上の留意点

- (1) 福島市内の調査結果であり、他地域では芽の露出状況等を把握した上で導入を図る。
- (2) 降雨前の予防散布を徹底し、十分な散布量を確保して予備枝等に薬液を付着させる。
- (3) 病原菌は罹病落葉でも越冬するため、落葉処理も併せて徹底する。
- (4) 本病の発生が多い園では、「総合的な対策」により菌密度を低減した上で導入を図る。

II 具体的データ等



図1 「幸水」りん片生組織の露出状況

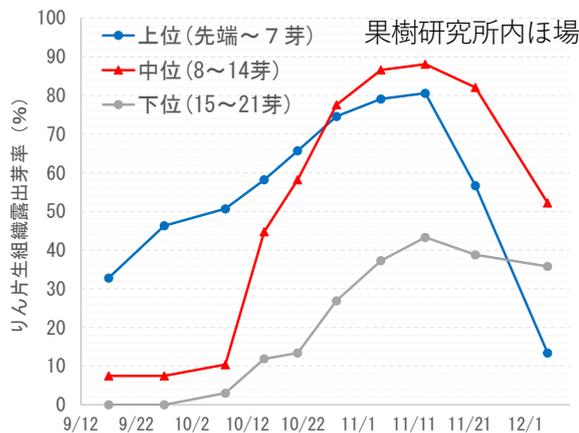


図2 「幸水」芽の着生位置と露出芽率(2019)

表1 「幸水」収穫後の防除削減がナシ黒星病の発生に及ぼす影響（福島市庭坂現地ほ場）

試験区	新梢葉調査						芽基部調査					
	2021年9月14日			2021年10月11日			2021年11月5日			2022年4～5月累計		
	調査数	発病数	発病率(%)	調査数	発病数	発病率(%)	調査数	発病数	発病率(%)	調査芽数	発病数	発病芽率(%)
削減区	553	5	0.9	543	5	0.9	98	1	1.0	815	4	0.5
対照区	536	5	0.9	590	6	1.0	71	1	1.4	1234	3	0.2

※2021年8月30日にクレソキシムメチル水和剤(ストロビーDF) 3,000倍を対照区のみ散布し、10月5日、10月19日、11月2日に両区にキャプタン水和剤(オーソサイド水和剤80)600倍を散布。

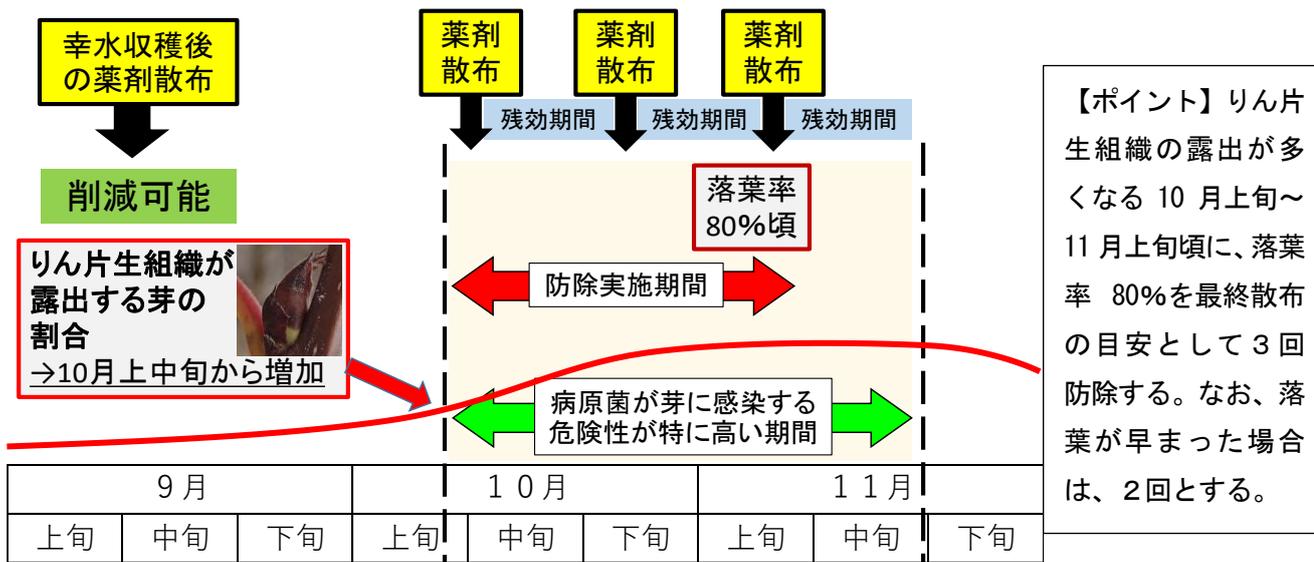


図3 翌年の芽基部病斑の発生を抑制するための秋期防除適期の考え方

III その他

1 執筆者 藤田剛輝

2 成果を得た課題名

(1) 研究期間及び研究課題名 平成27～令和2年度 果樹病虫害の防除法改善に関する試験、令和3～7年度 県産農産物の輸出拡大に向けた生産・保鮮技術等の開発

3 主な参考文献・資料

七海隆之・菅野孝盛, ナシ黒星病の芽基部病斑の発生は追加の秋期防除によって効率的に抑制できる, 令和元年度普及に移しうる成果.